

記念論文

機関誌『舞踊教育学研究』の成果と課題

宇都宮大学名誉教授 茅野 理子

はじめに

平成30年に開催された第38回全国創作舞踊研究発表会（埼玉大会）において退職記念講演の機会をいただき、「機関誌『舞踊教育学研究』の課題と展望」と題してお話をさせていただきました。

創刊号から数年にわたって編集作業に携わってきた立場から、発刊に至る経緯や編集内容上の展開、組織面での課題を踏まえつつ本誌の意義と期待を述べた。

本稿では、その内容に加えて、創刊号から第20号までに掲載された論文の傾向を検討することを通して、本誌の成果と課題について更に論を深めたい。

なお、本研究会の活動については、第20号に掲載された高橋和子氏の記念論文「日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門 舞踊研究会の成果と課題」を参照されたい。

1. 創刊号に至る過程

『舞踊教育学研究』発刊に際しての提案が気運の高まりとともに最初になされたのは、第16回全国大会総会(1996)での協議であったと記憶する。翌年の全国大会で具体化し、平成10年(1998)3月7日の理事会において創刊号編集内容検討、同年12月発刊となった。その背景には、全国大会をベースにした舞踊研究会活動の充実があった。

創刊号の巻頭言に当時の研究会会長であった松本富子氏は次のように語っている(1998, p. 1)。

当初の活動は、体育館で作品発表会をおこなう舞踊表現研究から出発し、学生と教官^{注1)}による動きや音楽・衣装・照明など総合的な視野からの研究へと発展していきました。ついで、教官の舞踊教育に関する研究論文の発表が行われるようになり、学会活動の様相を強めながら(1977)、全国大会へと発展を遂げ(1981)、内容的にもVTRを用いた実践研究発表、専門家集団である会員によるワークショップなど(1996)、新たなスタイルを導入した研究の公開がなされるなど、新しい研究と教育への提案が行われるようになってまいりました。時々投じた一石が流れを与え、時代を創ってきたことが実感されます。特に、日本の他の学会には見られない実技や映像による実証的な発表スタイルをもつ学会活動は評価できるものであり、舞踊教育関係者・研究者による内実のともなった大会として、望ましい姿が実現されつつあるのではないかと考えております。

また、高橋和子氏は、研究会活動について、第18回(1970年)^{注2)}から教官による研究会が併設されたこと、研究テーマは舞踊に関する課題を提示し、それに基づいて各大学の舞踊教官が以下のようなテーマに基づいて研究発表を行ったことを報告している(2019)。

「大学における舞踊の諸問題」(1970)、「配光・演出について」(1971)、「配光・音」(1972)、「舞踊の主題について」(1973)、「舞踊鑑賞&作品研究」(1974)、「舞踊作品の構成について」(1975)、「テーマ・動きのとらえ方・衣装」(1976)

その後は、各教官が各自の研究テーマを発表する学会形式になり、第1回全国創作舞踊研究発表会(1981年、群馬大学主催)において2日間開催(一日目は研究会、二日目は発表会)と現在の大会日程となったことを示している。「研究会では、各教員の個人研究やプロジェクト研究、退職教員による記念講演、学習指導要領改編や学部改革における保健体育講座の位置づけやカリキュラム

等に関するシンポジウムも開催されてきた。また、近年では大学院生（現職教員を含む）の増加に伴い、院生の研究発表の場としても機能している。この傾向は日本体育学会大会や他の学会の傾向と類似している。」^{P.4)}

このように、全国大会時に開催される研究発表会自体は、全国になる以前の教官研究会に端を発し、教員研究発表会、会員研究発表会と展開した。そして、研究活動の蓄積の基に学会組織への発展を期して機関誌『舞踊教育学研究』は誕生したと言える。

2. 編集内容の変遷

編集内容の変遷について、それぞれの節目の号をピックアップして述べたい。

創刊号発刊にあたっては、表紙タイトルの下に3本の線を配して号数を示すようにした（図1参照）。3本は、研究、教育、作品創作（発表）の三つを意図し、研究及び作品創作（発表）は継続を表す直線で、教育は人々が集い、支え合って一つの線になるよう点線で表した。ささやかではあるが、本研究会を象徴する唯一の意匠であった。

ISSN番号を取得して、表紙裏に研究会内規、裏表紙裏に投稿規定を配した。

また、内容的には、巻頭言、投稿論文、支部報告、理事会報告・全国大会（総会）報告で編み、学術誌としての体裁を整えた。

第3号は総頁52ページであり、裏表紙に英文タイトルがついたこと（図2参照）、第16回大会～第19回大会までのダンス・ワークショップが特集として組まれたことが特徴となっている。ワークショップの抄録は、第11号以降毎号報告され、貴重な資料となっている（巻末資料1参照）。

「会員による舞踊教育学関係著書・論文一覧」（第2号及び第3号）は、第5号から「舞踊教育実践・研究資料」と改称し第14号まで続いた。会員の活動は、ほかに学生指導・社会的活動を「会

舞踊教育学研究	
創刊号	
巻頭言	松本 富子 1
記念論文 舞踊教育研究の共生	三浦 弓杖 3
原著論文 コンタクト・ワーク経験を通じた「自尊感情」と「ボディ・イメージ」の変化とその関係	清水 知恵 13
創作ダンス学習の指導における「作品名」の機能についての一考察	麻生和江・上妻由理・住吉祐子 31
資料 徳島県の民俗舞踊を取り入れたダンスによる民俗舞踊の教材化への試み	安藤 幸・梶浦眞理 39
プロジェクト研究報告	園枝タカ子 49
理事会報告 / 第17回全国大会報告	50
支部報告	52
日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門 舞 踊 研 究 会 1998	

図1 創刊号表紙（和文タイトル）

Japan Journal of Dance Education	
No.3 2000	
ISSN 1345-0396	
Forward	Tomiko Matsumoto 1
Feature Articles on Dance Workshop	Kazuko Takahashi 3
The 16th Congress	C. Shimizu·K. Takahashi·E. Suzuki·N. Harada H. Kimura·N. Aisamo·C. Matsuo·Y. Murata M. Adachi·Y. Takahashi·T. Koga·A. Kajiwara
The 17th Congress	Kazuko Takahashi·Yoshiko Murata
The 18th Congress	Kyoko Fujimoto·Chie Shimizu
The 19th Congress	Shiho Hirokane·Chiaki Matsuo
Articles	
A Study on Educational Value of Aerobic Dance	Chiaki Matsuo 17
Research Notes	
The Process and Results of Dance Creation Activities in Cooperation with Undergraduates and Persons with Mental Handicap	Kazue Aso 29
A List of Publications (2000)	41
Annual Report	45
Edited by Japanese Society of Dance Education Japan	

図2 第3号裏表紙（英文タイトル）

員活動報告」として新たにまとめ、第6号から第9号まで継続した。本会の会員の多くは我が国の舞踊教育を推進する研究・実践者（指導者）であり、その研究や指導実績を記録することは内外に有効な資料と成り得ると考えた（表1参照）。

「支部報告」は第4号から「地区活動報告」に改め、同じく第9号まで続いた。以前は交流事業が支部（地区）活動として成されていた時期がある（表2参照）。

第8号から毎年12月に開催される全国創作舞踊研究発表会で研究報告された内容が抄録として編集されるようになった。

そして、第14号からは査読を伴わない「ノート」等の発表ができるようになった。

また、退職される先生方にその都度記念論文の玉稿をいただき、特集として編集されてきた（巻末資料2参照）。先達の研究成果からの提言は、後進にとって明確な道標となっている。

このような経緯を経て、現在の編集体制になったのは第15号からである。

表1. 会員による舞踊教育学関係著書・論文一覧（2002） 第5号一部引用 p.42, 44, 45

<p>I. 著書・論文（アルファベット順） 安藤 幸（鳴門教育大学） ・体育学習を支援するデジタル教材の開発と評価（第1報）—初等体育I（表現運動）での試み、鳴門教育大学授業実践研究—学部の授業改善をめざして—、創刊号：117-126、2002（共著） 以下、略</p> <p>II. 舞踊作品・舞台出演 寺山 由美（千葉大学） ・「鳥かご」振付（2002年6月）俳優座劇場</p> <p>III. 推薦図書</p>
--

表2. 地区活動報告 第5号一部引用 pp.61-62

<p>中国地区報告 島根大学 廣兼 志保 （1）中国地区で行われたプロジェクト研究や合同発表会など ●広島大学 主幹大学として、第22回全国創作舞踊研究発表会を開催。 （2）学生の活動（発表会や大会参加など） 省略 （3）中国地区での大学間交流状況など 中国地区から発信する連携・交流プログラムとして、平和学習と即興パフォーマンスを企画・実施した。 （企画・運営者：広島大学・松尾、鳥取大学・佐分利、島根大学・廣兼）第22回全国創作舞踊研究発表会にて。2002年12月22日-23日</p>

3. 編集委員会の組織化

編集委員は、創刊号から第8号まで関東の舞踊研究会理事が中心になって務めていた。

第9号からは鳥取大学（当時）の佐分利育代氏が編集委員長となり、全国にまで委員が拡大されたが、日本教育大学協会（国立大学法人）所属の教員に限定されていた。京都女子大学（当時）の原田奈名子氏が編集委員長となり、私立大学教員が委員に加わったのは第13号からである。

かつては交渉事やダイレクト印刷のための編集業務など、編集委員会事務局、編集委員長に多くの負担がかかっていたが、徐々に業務の分担化が図られつつあった。

そして、2014年から研究会理事が全国組織になったことで、編集委員会の組織化が本格的に始動したと言っても過言ではない。

現在では2名の男性教員が編集委員として加わり、編集内容や書式の見直し、担当体制等について活発な意見が交わされている。

第21号編集委員は以下の通りである（敬称略）。

編集委員長 清水知恵（福岡教育大学） 編集委員会事務局 木山慶子（群馬大学）
 編集委員 高田康史（広島文化学園大学） 近江 望（吉備国際大学）

4. 創刊号から第20号までの論文傾向

創刊号から第20号までの論文等についてその著者名と題目を巻末資料2にまとめた。

上田氏（2017）は、「ダンス指導に関する適切な実践研究があるのかを明らかにするために、ダンス指導に関する様々な研究、実践を分類、整理し」^{p.74}、検討を行っている。対象文献は、『舞踊教育学研究』『日本女子体育連盟学術研究』『女子体育』である。

『舞踊教育学研究』については、第1号から第15号までに掲載されている舞踊に関する原著論文と実践研究を分類し（図3）、次のように検討している。

「執筆者の多くは、舞踊教育を専門に研究している大学教員で」あり、「1名^{注3)}を除いて全て女性で、全体の96%を占めている。（略）内容においては、（略）授業実践が全体の41%を占めている。さらにその細目を調べると、エアロビクスダンスや現代的なリズムのダンス、視覚教材、評価基準、指導法に関してなど様々な内容に分類できる。現場の教員にとってダンスの授業を行う際に、経験豊かな指導者の言葉かけや場面に応じた評価基準、子どもの状況に応じた言葉かけなどが書かれた論文は大いに参考になる。（略）また、高等教育機関における指導者養成に関する内容の論文も多い。（略）こうした論文は、ダンスの授業を軽視したまま教員免許を取得できることも問題の一端であることを示している。」^{pp.74-75}

本機関誌が評価されているその一方で、上田氏は、「現場の教師に、こうした参考となる実践事例が届かない」^{p.77}理由を次のように続けている。「ダンス教育実践のための有効な手がかりがある事実を知らなかったり、名称が女子体育に特化しているため読書対象からはずれたりしていることも起因していよう。こうしたアクセスの問題は重視されなければならないであろう。また、3雑誌を通して、女性の執筆者が圧倒的に多いのが現状である。それゆえ、（略）ジェンダー・バイアスの問題が雑誌のアクセスの問題にも影響を与えているのではないかと考える。男性教師の苦手意識に加えて、実践研究について探究する際もその距離を遠ざけてしまう重要な要因ではないだろうか。言い換えれば、ジェンダーに関する偏見を取り除くことがダンス教育を向上させる近道であることを示していよう。」^{p.77}

この示唆は、本誌の意義を問うものであろう。『舞踊教育学』の舞踊学に基づく学問的位置づけを明確にした原著論文と有効な授業実践に基づく実践研究の両面から編集された内容は、今後更に重要な役割を担っていくものと期待できる。

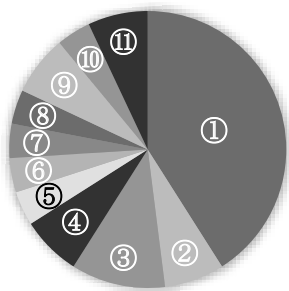


図3 第1号～第15号における研究内容(上田)

41%	①授業実践	32.4%
7%	②指導法	14.7%
11%	③高等教育機関における指導者養成	11.8%
7%	④運動分析	5.9%
4%	⑤作品分析	0%
4%	⑥作品テーマ	5.9%
4%	⑦研究動向	2.9%
4%	⑧舞踊教育史(創作)	2.9%
7%	⑨用語(概念)	8.8%
4%	⑩ノーマライゼーション	8.8%
7%	⑪その他	5.9%

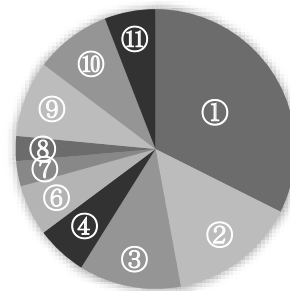


図4 第1号～第20号における研究内容(茅野)

注4)

さて、第1号から第20号までの（査読付き）投稿論文34件に限定して、上田氏と同様の分類により研究傾向を改めて見ていくことにする。

図4に示されるように、最も多いのはやはり授業実践であった。次いで指導（法）に関連する内容、指導者養成と続く。ただ、本誌が「舞踊教育学」としての意義をさらに深め、ダンス指導が普遍化するためには、大橋氏（2016）が指摘しているように、「理論的な裏付け」となるような研究がもっと増えていくことが望ましいように思われる。

また、指摘された著者の男女比の割合は、20号までみても変わらず男性は3名（うち1名は同一者）であり、女性が91%と圧倒的に多い。研究発表抄録で見ても、発表者129名中20名15.5%が男性であり、筆頭発表者に限定しても、82名中15名18.3%とやはり少ない。しかも、同一者が複数発表しているため、実質的にはこれよりも少なくなる。しかし、平成29年度（2018）から3年間では、3（5）、3（10）、7（9）名と増加傾向にあり、今後に期待できる。なお、（ ）内は女性数であり、発表者数はいずれも延べ人数である。

5. 当面する課題

（1）学術誌としての位置づけ

表3は、原著論文、実践研究、研究資料（資料）に分類された査読付き投稿論文数を示している。

表3. 掲載論文数（総数34件）

	原著論文	実践研究	研究資料
第1号	2	0	1
第2号	1	0	0
第3号	0	1	1
第4号	1	0	0
第5号	3	0	0
第6号	0	1	0
第7号	0	0	1
第8号	0	1	0
第9号	1	1	0
第10号	2	0	0
第11号	0	1	0
第12号	2	0	1
第13号	1	2	0
第14号	1	0	0
第15号	2	2	0
第16号	0	0	0
第17号	0	1	1
第18号	0	0	1
第19号	1	0	1
第20号	0	0	0

特に近年、原著論文数の減少が顕著であることが認められる。これは、一つには、学術誌としての査読基準が厳しくなったことにも因るのではないかと推察されるが、投稿数自体が少ないことも事実ではある。第16号、第20号では投稿論文が0となっている。

論文の投稿は第5号から締め切りを廃し、随時受け付けることになっているが、各号の発行にあたり、提出期限を定めて編集作業を行っている。全国大会時に研究発表をされた会員の積極的な投稿を期待して、これまで5月連休明けを提出期限とすることが多くあった。

学術誌としての水準を保ちつつ、多くの研究者の研究発表への門戸を広げる機関誌としての役割をどう展開していくか、根本的な課題となっている。

（2）発行費用

現在、会員数は約70名である。発行費用は会費と投稿料で賄われている。費用は20万円強（印刷費、郵送費を含む）であり、研究会の予算に占める割合は約3割である。投稿料が見込めない場合は、研究会予算からの補填となる。

こうした状況から、年会費は平成19年度以前3,000円であったのを平成20年度より5,000円とし、冊子代金も1,000円から1,500円にアップしている。

今後、会員や投稿論文数の拡大とともに、紙媒体ではなく電子媒体での発行の如何について検討課題となっている。

（3）編集委員の負担軽減

『舞踊教育学研究』の継続的な発行により、本誌の位置づけを確立したいという編集委員会の意向と、他方、発行予算が乏しいという現実的な問題から、これまで編集発行业務については編集委員のボランティアに頼ってきた。しかし、公務多忙化が極まり、余裕のない中での務めは厳しくな

りつつある。社会活動としての業績評価の強化を含めて今後の課題である。

(4) バックナンバーの取り扱い

現在、バックナンバーは舞踊研究会事務局が保管している。しかし、事務局担当者の交代（役員は2年任期で留任を妨げない）もあり、多くの冊数を保管することが難しい。国立国会図書館に創刊号からの冊子を寄贈しているほか、日本女子体育大学図書館において創刊号からの購読が継続され、保存の一助となっているが、今後は、内外への発信という観点からも、ホームページの立ち上げによる電子媒体での発行が課題として検討される。

まとめにかえて 展望 — 本誌への期待 —

まとめにかえて、本誌への期待を込めて今後について特に以下の4点を展望したい。

- (1) 学術誌としての充実
- (2) 学会組織への移行
- (3) プロジェクト研究の推進
- (4) 内外への発信

学術誌として質量ともに充実を図るためには、会員増により裾野を広げる必要がある。それが、ひいては学会組織への移行を推進することになる。そのためには、ホームページの立ち上げ等による内外への発信の普及は不可欠であるだろう。また、科研費等によるプロジェクト研究の再開は、会員間の学びや研究会の意義を深める意味で大切な活動になると思われる。

最後に、創刊号に掲載された三浦弓枝氏の記念論文「舞踊教育研究の共生」の中で提言された言葉を引用してむすびの言葉としたい（1998、p.12）。

「かつて、先輩教官らが共同で著書を出版したように、本舞踊研究会が研究の成果を一冊の本にまとめられることを願っている。」

謝辞

在職中、本研究会の活動が大きな支えでした。皆々様に衷心より深く感謝申し上げます。

本会並びに『舞踊教育学研究』のなお一層のご発展を祈念いたします。

注：

- 1) 国立大学当時は文部教官と称された。
- 2) 全国大会以前の大会通算を示す。
- 3) 男性執筆者は、資料に見られるように3名（うち2論文は同一筆頭著者）である。また、対象文献の一部に記念論文が混在している。
- 4) 分類の研究内容は、細川・松本による舞踊学の体系*を基にしている（上田）。

*細川江利子・松本千代栄（1991）モダンダンス理論とその周辺領域．舞踊学 13：20.

文献

上田雅純（2017）表現運動の新たな可能性を切り拓く／実践事例はこんなにあるのに現場に届かない、なぜ？体育科教育 65(3)：74-77.

大橋奈希左（2016）学校における創作ダンス教育の原理的考察．平成27年度日本大学博士論文.

高橋和子（2019）日本教育大学協会全国保健体育・保険研究部門 舞踊研究会の成果と課題．舞踊教育学研究 20：3-16.

松本富子（1998）巻頭言．舞踊教育学研究．1：1-2.

三浦弓杖（1998）舞踊教育研究の共生．舞踊教育学研究 1：3-12.

資料1：全国大会ダンス・ワークショップ抄録一覧（第16号～第20号）と第20号抄録一部

	著者名	タイトル
第16号	山田 章弘	ストリートダンス・タイム
	森田 陽子	しゃんしゃん傘踊りを踊ってみなんせ
	佐分利 育代	インクルーシブダンス「星の入り口」に参加しませんか
	高橋 和子	体ほぐしと表現
	細川 江利子	創作ダンス指導の手がかり
	村田 芳子	現代的なリズムのダンスの特性を押さえた指導
第17号	金谷 麻理子	トランポリン・ワークショップ
	遠藤 卓郎	ボディワーク
	平山 素子	ダンス・ワークショップ
第18号	素我螺部	パズル・ムーヴメントー2人組からグループワークへ発展させる仕掛け作りー
	松尾 千秋	誰にでもできるダンス授業のポイントー「定型と自由」「ペア学習」をキーワードに、1人1人の動きを引き出し、活かすことからー
	村田 芳子	リズムから表現へ、踊る楽しさと身体表現の魅力を体験できるダンス指導
第19号	小笠原 大輔	カポエイラの動きを取り入れたダンスとユーモア・ダンス創作法
	原田 奈名子	A：操体法からダンスへ& B：からだの仕組みに従って動いてみよう
	福當 俊夫	郡上踊り
第20号	高田 康史	素材としてのヒップホップダンスに迫る～振付型、ダンスバトル・サイファー型、DJタイム型の分類提案～
	小笠原 大輔	強引さとひらめきから生まれるおもしろ表現～具象と抽象のあいだで遊ぶ創作ダンス～

●佐分利育代氏「インクルーシブダンス『星の入り口』に……」（第16号，p.67）抜粋

2. 「星の入り口」の練習体験ワークショップ

(1) 自己紹介と動きのシェア

ウォーミングアップは、円になって始まる。

○あなたの名前は何ですか？

○あなたの好きな動きはなんですか？



両方の特徴と出合い、様々な表現が生まれた。

頭に乗せる。振り回す。投げて戻ってくるものを取る。叩いて音を出す。体に巻き付ける。短く持つてゆらす。振り回しながら自分も回る。床に弾ませる。2人でぶつける。ぶつけ合って絡まったペットボトルとゴム紐を大縄のように回す。など

見つけた表現は、見せ合い真似し合う。この活動は、
 ・繰り返し行える技能獲得の機会となる
 ・認め、認められる体験となる
 ・様々な遊びの種類を体験できる
 などの意味を持つと考える。

●小笠原大輔氏「強引さとひらめきから生まれるおもしろ表現」（第20号，p.51）抜粋

1. はじめに ーワークショップ概要ー

創作ダンスでは「自由な表現」という言葉に束縛され、かえって不自由に陥ることが往々にしてある。今回は「制限＝条件＝最大のヒント」と考え、表現を楽しむ。一見、無理難題と思えるテーマを、頭脳と身体をフル活動させることにより、“棚ボタ”的に小作品を生み出す。「ムチャぶりカード」による言葉遊びと身体表現をメインに、制限付き即興ダンスや簡単なコンタクト、関係性で魅せるダンスと伏線回収も行う。

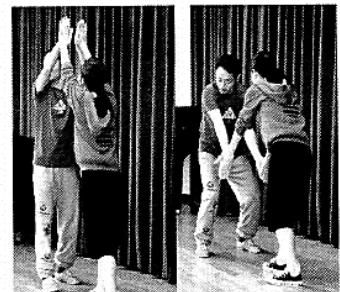
2. 活動I「動いて楽しむ、かかわる」

1) 「ハイ・ロータッチ」その1

うろうろ歩き回りながらすれ違う人とハイタッ

3) 「ハイ・ロータッチ」その2 (1のつづき)

その1からの続きで、接した手の平を互いに押してから回転し合う「ずっぴょん・ずっぴょん」や、最初から両手



「ダブルハイタッチ・スペシャル」

でハイタッチして始める少し複雑な「ダブルハイタッチ・スペシャル」などを行う。押す力とタイミングなどを互いに感じ取って調節すると非常に軽快に行うことができる。また更に様々な音楽を

資料2：創刊号（1998）～第20号（2019）の論文等

創刊号（1998） *資料中網掛けは男性著者を示す。

論文内容	著者名	題 目
記念論文	三浦 弓杖	舞踊教育研究の共生
原著論文	清水 知恵	コンタクト・ワーク経験を通じた「自尊感情」と「ボディ・イメージ」の変化とその関係
	麻生 和江 上妻 由理 住吉 祐子	創作ダンス学習の指導における「作品名」の機能についての一考察
	安藤 幸 梶浦 眞理	徳島県の民俗舞踊を取り入れたダンスによる民俗舞踊の教材化への試み

第2号（1999）

論文内容	著者名	題 目
特集 第18回全国 大会シンポ ジウム	高橋 和子	これからの舞踊教育を語る－学習指導要領を超えて－
	細江 文利	学習指導要領の全体的視点から舞踊を見る
	村田 芳子	小学校の視点から舞踊教育を見る
	松本 富子	中学校の視点から舞踊教育を見る
寄稿	堀江 三郎	よろずのものに支えられて－教育舞踊研究者の舞踊談論－
	松下 清子	舞踊と学校教育－私の歩んだ道－
原著論文	佐分利 育代	ダンス学習における運動観察－聴覚障害児の学習を例として－

第3号（2000）

論文内容	著者名	題 目
原著論文	松尾 千秋	エアロビックダンスの教育的価値に関する検討
資料	麻生 和江	知的障害者と大学生の共同による作品創作活動の経過と成果

第4号（2002）

論文内容	著者名	題 目
記念論文	川口 千代	表現力をはぐくむ学習指導－ダンス学習を中心に－
原著論文	清水 知恵	舞踊に類する療法および各種ボディ／マインド・アプローチに関する実践研究動向と今後の課題
大会シンポ ジウム論文	南 聲鐘	「尻振り舞」考－日韓比較視点からの三番叟の一試論－
研究紹介	福原 昌恵	明治年間の愛珠幼稚園書籍所蔵について－遊戯書とその利用を中心に－

第5号（2003）

論文内容	著者名	題 目
原著論文	茅野 理子	表現運動の主體的指導実践に及ぼす要因－宇都宮大学教員養成プログラムの有効性について－
	寺山 由美	舞踊教育における模倣の問題－「模倣」の概念とその捉え方－
	松本 富子	アメリカにおけるダンス教員養成改革－オハイオ州立大学ダンス学科における養成プログラムを事例として－
研究雑感	白須 尋子	シルクロードとダンス

第6号（2004）

論文内容	著者名	題 目
記念論文	高橋 芳子	魂をゆさぶる表現
実践研究	松尾 千秋	動きの構成に重点をおいたエアロビックダンス授業内容の追究
大会シンポ ジウム	松尾 千秋	舞踊教育の将来像

第7号（2005）

論文内容	著者名	題 目
研究資料	細川 江利子 佐藤 みどり 宮本 乙女	創作ダンス授業における学習者の技能評価－技能評価基準作成の試み－

第8号 (2006)

論文内容	著者名	題 目
記念論文	頭川 昭子	舞踊のイメージ研究～内的イメージと外的イメージのモデル作成と作品分析～
実践研究	篠田 明音	ダンスの授業における学習者の動きの発生に関する事例研究～牛山による実践の場面分析を中心に～
実践報告	廣兼 志保	創作舞踊研究発表会における「地域文化の発信」「交流と協同」の位相と学び

第9号 (2007)

論文内容	著者名	題 目
原著論文	松尾 千秋	中学校における日本の民俗舞踊の取り扱い～広島県効率中学校を対象とした実態調査の経年的比較～
実践研究	甲賀 成美 茅野 理子	「体ほぐしの運動」の内容に関する事例研究～小学校高学年でのダンス的内容とプロブレム・ソルビングを中心とした内容～
実践報告	白須 尋子	創作舞踊研究発表会における“「原点」に帰れ”の意味について～第25回(通算53回)全国創作舞踊研究発表会東京大会を実践の場として～
大会シンポジウム	松本 富子	舞踊教育の国際性における課題と展望

第10号 (2008)

論文内容	著者名	題 目
原著論文	松本 富子	グループ創作場面における学習者相互の「関わり」に関する事例研究～学習行動ならびに個人の内的特性に着目した量的質的研究～
	佐分利 育代	聴覚障害児と視覚障害児の即興表現に現れた運動のダイナミクス
大会シンポジウム	松本 富子 麻生 和江	第26回全国創作舞踊研究発表会シンポジウム報告 舞踊教育の未来を描く～教育論議の動向と舞踊教育～

第11号 (2009)

論文内容	著者名	題 目
実践研究	伊藤 恵子 熊谷 佳代	小学校における表現運動の実践的研究～技能に関する評価表の作成と基準達成のための指導事例について～

第12号 (2010)

論文内容	著者名	題 目
原著論文	寺山 由美	創作を主とする舞踊教育の生成過程～「与える」から「引き出す」授業への萌芽～
	八木 ありさ	気分と身体面の変容に見るダンス・セラピーの効果～大学生を対象として～
研究資料	小西 寛之 麻生 和江	知的障がい者に関する健常者の認識の現状～おおいた国体式典歓迎演技の出演者の場合～

第13号 (2011)

論文内容	著者名	題 目
原著論文	成瀬 麻美 寺山 由美	高等学校教員のダンスの授業に対する意識について～授業内容に着目して～
実践研究	白井 麻子 伊藤 美智子	「多様な動き」を素材とした視聴覚教材が表現運動の学習活動に与える効果：小学校6年生を対象に心に響く動きを探る実践的試み
	大橋 奈希左 廣兼 志保	教員養成課程における身体コミュニケーション力育成のための実践的研究～学習者の相互評価を目指して～

第14号 (2012)

論文内容	著者名	題 目
原著論文	高田 康史 松尾 千秋	ステップ習得を含む現代的なリズムのダンスの授業が生徒の運動有能感へ及ぼす影響
記念講演	白須 尋子	退職記念講演「おわりのはじまり」
実践ノート	麻生 和江	「レッツダンスでガッツ元気の会」現状と今後
研究ノート	原田 奈名子	「わたし」からの科学の試み(1)～ヨガ体験者の体験内容を一人称で記述する～

第 15 号 (2013)

論文内容	著者名	題 目
原著論文	大橋 奈希左	ダンス教育における「即興」の発現域についての考察－作品の創作過程に着目して－
	中村 恭子 宮本 乙女	中学生のダンス経験とダンスイメージの変容
実践研究	白井 麻子	コミュニティダンス事業が参加者に及ぼす影響に関する研究：静岡コミュニティダンスプロジェクトの事例を通して
	高田 康史 松尾 千秋	現代的なリズムのダンスの授業の学習内容に関する検討－中学生のステップ習得成果に焦点づけて－

第 16 号 (2015)

論文内容	著者名	題 目
記念論文	松本 富子	ダンスの授業研究－授業をめぐる諸テーマの探求とその方法－
実践ノート	河合 史菜 村田 芳子	ダンス・ワークショップにおける進行法－動きの方法「GAGA」を事例に－
	大橋 奈希左	現職中学校教員を対象としたダンス領域の研修について－受講者の学習経験と講習の内容－

第 17 号 (2015)

論文内容	著者名	題 目
記念論文	佐分利 育代	障害のある人達と探ったダンスの力
実践研究	七澤 朱音	表現運動における教師の省察に関する検討－研究校における授業研究と指導歴の有無に着目して－
研究資料	麻生 和江	知的障がい者における否定的行動の立ち直り支援法について－大学生とのダンス交流会の実践を通して－
研究ノート	林 夏木	アジア・アフリカ系民族舞踊をベースとした日本人フリーランスダンサーが抱える課題－ダンサーAの経歴と現状報告を事例に－

第 18 号 (2016)

論文内容	著者名	題 目
研究資料	渡辺 碧 八木 ありさ	ダンサー養成機関における「コンディショニング」関連科目の国際比較研究（序）－日米英独の大学カリキュラムに着目して－
研究ノート	小林 みゆき	舞踊作品創作におけるフェルデンクライス・メソッドを援用した一実践－Awareness Through Movement 指導の声かけを手がかりに－
	茅野 理子	集団リズム遊びが自閉症スペクトラム児のコミュニケーション能力に働きかける可能性について－模倣と始発に着目した一考察－

第 19 号 (2018)

論文内容	著者名	題 目
原著論文	村瀬 瑠美 寺山 由美	他者作品を踊る際の踊り手による作品イメージの現実化の取り組み－振付の動きの習得との関係性に着目して－
研究資料	中村 恭子 中村 なおみ 宮本 乙女 原田 純子	中学校におけるダンス必修化後の授業実践計画と担当教員に関する実態調査
研究ノート	荻江 瞳	中学校ダンス授業における教員の意識

第 20 号 (2019)

論文内容	著者名	題 目
記念論文	高橋 和子	日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門 舞踊研究会の成果と課題
	原田 奈名子	舞踊・ダンスにおける「からだ観」・「舞踊観」